

## 【8 島原鉄道 Shimabara Railway】



三会駅～島原駅から(右は中尾川)

島原鉄道では、諫早駅～島原外港駅の区間のうち、山側の視界が開けたところからであれば、“北西面～東面の雲仙岳”が眺望できます。本路線は、山麓の有明海沿いをぐるっと円を描くように走行するため、雲仙岳の山々の組み合わせや見える角度が時々刻々と変化していき、雲仙岳の多彩な表情を楽しめるのが本路線ならではの特色です。

島原半島の小中学校の校歌には、雲仙岳や有明海を意味する言葉が登場し、平成27年3月時点で約9割の小中学校の校歌に雲仙岳と有明海／橘湾を意味する言葉が確認されました。学校の校歌には、生徒に郷土の自然の魅力を伝え、その雄大さや美しさを精神的な成長目標として掲げる、という側面があり、雲仙岳と海のセットは島原半島で大事にされてきた風景と言えます。また、雲仙天草国立公園の雲仙地域の特色は、三方の海と雲仙岳が織りなす“水陸の大展望”であり、本路線の左右の車窓から見渡せる海と雲仙岳は、地域住民と旅行者の両方にとって楽しめる景観と言えるでしょう。

本路線が沿って走る有明海には、全国一の規模を誇る干潟が広がっていますが、その干潟の泥は、かつての阿蘇山の大噴火による噴出物を筑後川や白川などが日々流し込んでいるもので、その泥が外洋に流れ出さないのは、雲仙岳そびえる島原半島が有明海の水の出入口を狭めているためです。また、島原半島東部の区間からは、阿蘇山が眺望できることもあり、阿蘇山と雲仙岳の間の歴史的な大三角形(※阿蘇地域のページ参照)を視覚的にイメージすることが可能です。

なお、黄色い列車の車体に表示された子守をする女性のイラストは、“島原の子守歌”に因んだもので、この歌の作詞を行った本社元役員の宮崎康平氏は、雲仙岳そびえる島原半島の古代史を研究し、“まぼろしの邪馬台国”を執筆しています。島原半島では縄文時代～弥生時代の遺跡が多く発見され、雲仙岳には“天孫降臨”の伝承があるなど、古代の歴史ロマンが感じられます。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、島原鉄道で旅してみませんか？

●島原鉄道の情報はこちら↓

島原鉄道株式会社 [http://www.shimatetsu.co.jp/kihon/pub/default.aspx?c\\_id=4](http://www.shimatetsu.co.jp/kihon/pub/default.aspx?c_id=4)



島原駅構内から(島原城と眉山・平成新山)



南島原駅付近から(眉山)